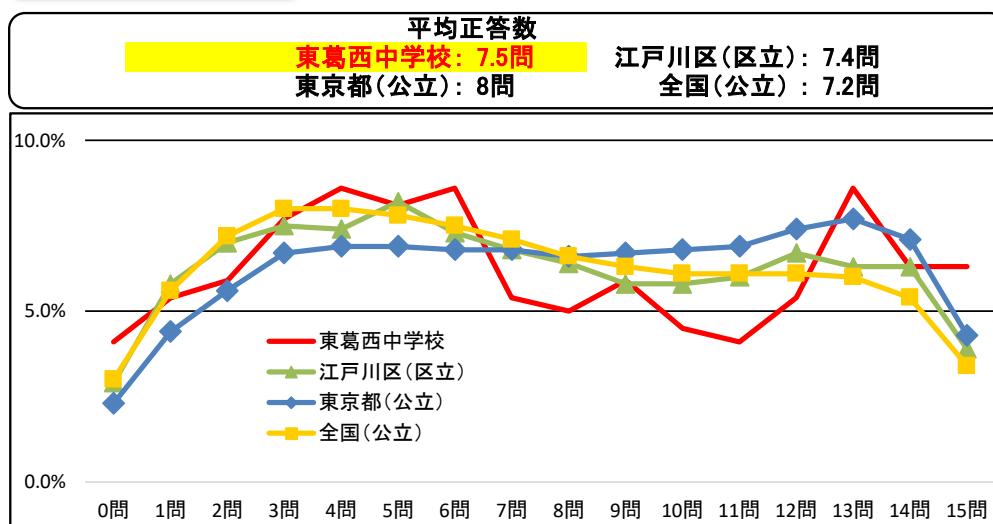


# 令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【数学】東葛西中学校

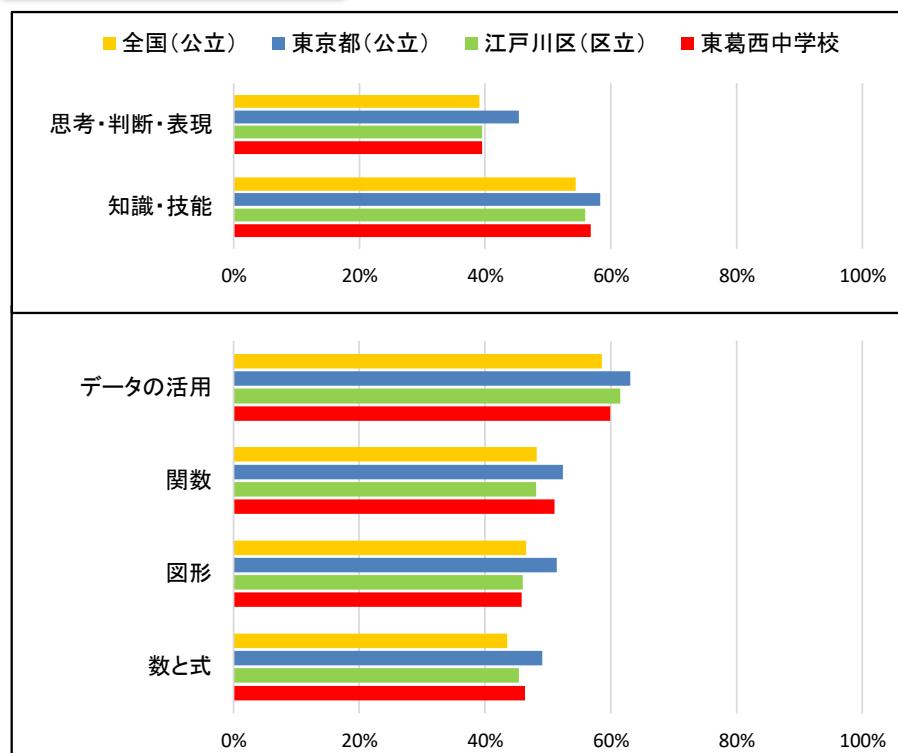
## 正答数分布



### 【平均正答率の差】

東葛西中学校	50%
江戸川区(区立)	49%
東京都(公立)	53%
全国(公立)	48.3%
都との差(ポイント)	-3.0

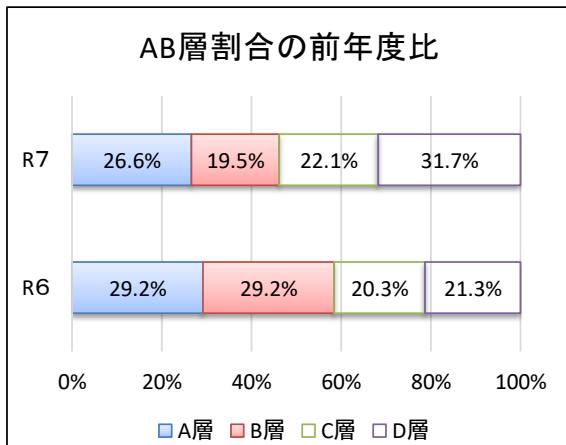
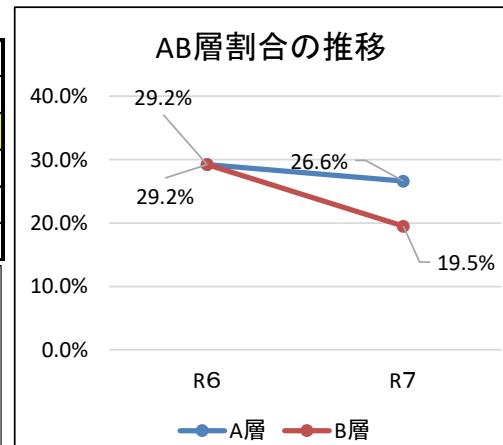
## 「領域別」の結果



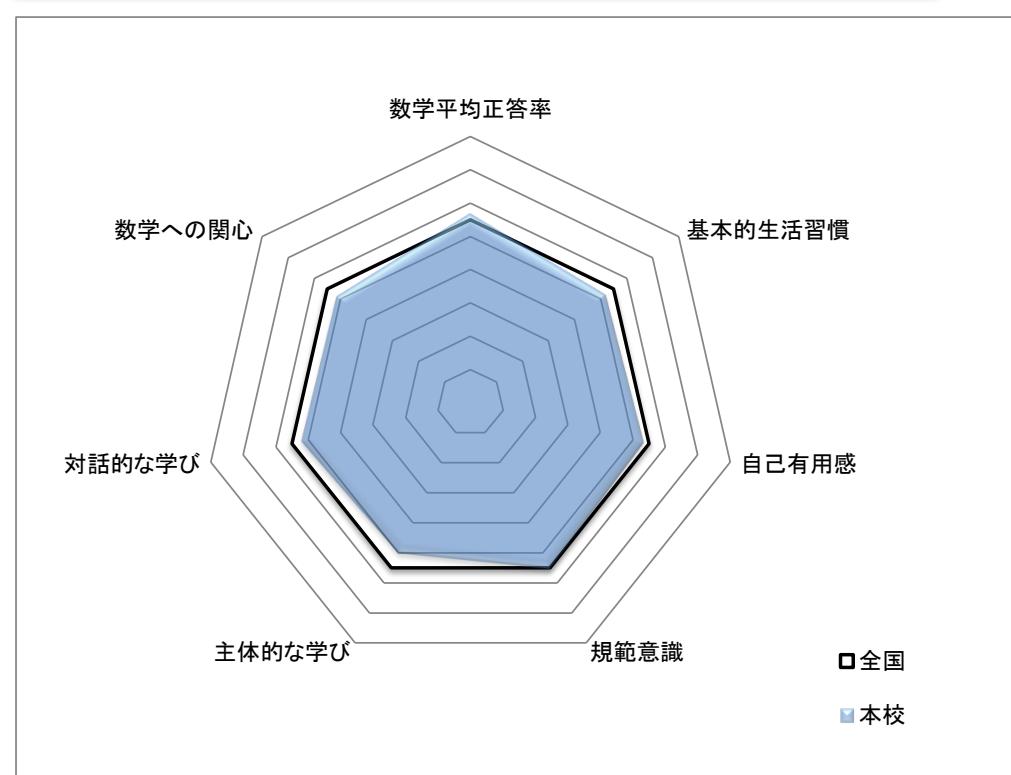
## 四分位における割合 (都全体の四分位による)

数学	A層	B層	C層	D層
	12~15問	8~11問	4~7問	0~3問
東葛西中学校	26.6%	19.5%	22.1%	31.7%
江戸川区(区立)	23.2%	24.0%	29.6%	23.2%
東京都(公立)	26.5%	27.0%	27.5%	19.0%
全国(公立)	20.9%	25.1%	30.2%	23.8%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



## 各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



### 《チャートの特徴》

全体的に全国平均と非常に近い傾向を示しており、特に大きな乖離は見られない。学力の基盤となる生活習慣や意識面が安定しており、基礎的な学習態度が確立していると考えられる。「平均正答率」が全国とほぼ同等であることから、基礎学力は定着しているといえる一方で、「主体的な学び」と「対話的な学び」の項目では、わずかに全国を下回る傾向があり、問題解決過程を共有し、考え方を表現する活動が十分でない可能性がある。

### 《家庭・地域への働きかけ》

家庭・地域と連携し、補習教室やエドスク、自習教室への参加を呼び掛けるなど、学習への意欲を支える環境づくりを進める。保護者への情報発信や地域学習の機会を通して、共に育む体制を強化する。学校だけでなく、家庭でも「毎日短時間でも机に向かう」習慣を大切にする意識を共有する。

### 《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について  
本校のAB層の合計では、全国と同じ46%と5割弱、東京都の53.5%より低い結果であったが、A層のみでは東京都よりも0.1%高い26.6%であった。  
取組については、AB層の学力を維持・伸長させるとともに、C層を中心に上位層への移行を促す指導を継続していく。授業内では、思考過程を言語化する活動や、発展的課題への挑戦を取り入れ、基礎の確実な定着と応用力の育成を両立させる。  
毎時間の授業では、前時までの振り返りの時間を確保し、具体的な目標を明示して見通しをもたせる。生徒の実態に応じて、問題文に線を引く(数値・単位・聞かれていること)ことや、図や表で整理してから計算させるなど、「何を聞かれているか」が明確になるように支援しながら授業を進める。

### 《学校の取組》

・教員の指導力向上  
教員間で誤答傾向や指導ポイントを共有し、単元ごとのつまずきを可視化する取り組みを進め、授業を通して、思考過程を重視した授業づくりを推進し、指導力の向上を図る。  
教員の指導力を高めるためには、情報を共有し、指導の工夫を学校全体で考える体制づくりが必要である。また、研究授業や授業観察を校内研修で取り入れ、生徒の思考を引き出す発問や支援の仕方を学び合える環境を整えて、教員の授業力の向上をめざす。

### ・基礎学力の保障

学び方・支え方・確認の仕組みを整える。数量や図形の基本概念の理解のために、小テストと単元別検定の実施を継続する。検定後には放課後補習教室を取り入れ、個別で対応しながら基礎学力の定着を目指す。  
「わからないまま授業が進む」状態を防ぐために、補習教室や自習教室、質問教室を放課後に実施する。

### ・学習習慣の確立

フォーサイト手帳の活用、提出物点検を通して学習習慣の定着を促す。小さな成功体験を積み重ね、自己効力感を高める支援を継続する。家庭での実践の難しい生徒には、補習教室や自習教室に参加させ、学校で学習の時間を確保する。

### ・AB層の育成

「わかる」だけではなく、既習の知識と数学の用語を用いて、「筋道立てて考え、説明できる力」を伸ばす。  
思考力・活用力を問う発展的課題への挑戦機会を設定し、個別最適な授業実践を行う。  
授業内外での発表活動を通して、自己表現力を伸ばし、自らの考えや解き方を伝え合う活動や学び合い活動の中で、お互いの学力を高め合う機会を多く設定していくなど、「なぜそうなるか」を言語化させる授業を重視していく。